

# 川島哲郎氏の「自然的生産諸力」概念の回顧と再考

——「関係」論的視座からのテキストの試み——

石 井 雄 二

## I 問題の所在と課題の限定

一般に、すぐれた古典といわれる書物が、後々にまで生き生きとした生命力を保っているのは、それが書かれた時代の問題を的確にとらえ、一つの明確な意味世界を表示しているばかりでなく、それを読むことによって、そこから多様なテキストを探り出すことのできる豊かな可能性をもっているからであろう。その意味において、川島哲原著「自然的生産諸力について—ウイットフォージェル批判によせて—」（『大阪市大経済学年報』第2集，1952年）<sup>1)</sup>も、たしかに古典と呼ぶに値するものである。そうした一般論でなくとも、次の二つの意味において、古典としての資格を十分もっているといえよう。

すなわち、一つは、それが川島哲郎氏の処女論文ともいえるもので、その後の内在的に連関して展開する氏の経済地理学研究のスプリングボードになったということ<sup>2)</sup>であり、もう一つは、地理学の分野において、一つの固有の研究対象として常に問題にしてきた人間と自然環境との関係<sup>3)</sup>について明解なパラダイムを提示し、今日に至るまで、社会科学としての経済地理学に理論的展望を与え、広く経済地理学研究者に指針を示す知的共有財産となったということである。

こうした古典としての氏の論文において、氏が執拗に論及した課題は、ひとことで言えば、人間にとって自然環境からの解放とはどういうことか、逆に人間が自然環境にどのように制約されるのか、人間と自然環境の相互関係を労働過程を媒介にして明らかにすることであったといえる。そこでは、労働過程＝「生産諸力」を明確に「自然的生産諸力」と「社会的生産諸力」に区分し、自然環境を労働生産物でない「自然的生産諸力」に結びつけてとらえ、人間の本質である労働によって制御できる「社会的生産諸力」が拡大し、「自然的生産諸力」の比重が低下することこそが、「生産諸力」の発展であるとし、人間が自然環境から解放される歴史過程が鮮やかに描かれている。

この論文において、氏が終始格闘してやまなかったことは、対自然環境との関係で、人間の主体性をどこに求めるのかということであり、そのことを追求するために、自然環境という言葉に冠する「自然」、その対立項である「社会」の意味・概念を生産諸力の次元を突き抜けて、物質、精神、観念形態を含む人間が表象するすべてのものに対し構造的に遡上して明らかにしようと努めてい

る。氏が論及しようとした「自然」と「社会」の同一の関係が重層的に構成される意味世界は、ウィットフォールゲルの所説を素材に、地理的唯物論や自然環境決定論の克服をめざすという直接的な課題を追求する過程で浮かびあがってきたものである。というよりは、地理的唯物論や自然環境決定論の克服を方法的に根底から行ったからこそ、人間の意味世界を「自然」、「社会」という2項対立の階層的な体系として問題とせざるをえなかったというべきであろう。

しかしながら、こうした意味世界を構成する「自然」と「社会」の概念は、かならずしも統一した視点から明確なかたちで把握されているとはいえない。なるほど、氏の論文の中心概念である「自然的生産諸力」と「社会的生産諸力」にそれぞれ結びつく「自然」や「社会」については、労働の生産物であるのかどうかという観点から峻別されており、そうであるからこそ自然環境からの人間の解放という命題を打ち立てることができたと考えられる。しかし、「自然的生産諸力」の「自然」一つとってみても、「実体」概念であるのか、「関係」概念であるのかという点になると、実に釈然としない。それが、「実体」であるのか「関係」としてとらえられているのかという違いは、自然の征服、自然環境からの解放ということの意味に、本質的なテキスト上の変更を迫るほどに決定的に重要である。

本稿では、氏が提示した「自然」と「社会」の同一の関係を階層的に包含する意味世界を振り返りながら、それを「関係」論の視点から統一的に整序し直すことによって、できるかぎり「実体」論的思考を相対化し、氏が描き出した人間と自然環境の関係図式の意味をいま一度省察することにした。そのことは、「社会的生産諸力」に人間存在の本質を見だし、人間の主体性が自然環境に内在する法則性をどこまでも探り当て、その普遍的な利用可能性の範囲を拡大していくという、ともすれば生産力発展至上主義、科学技術至上主義の楽観的パラダイムに陥りがちな氏の所説の相対化を試みる作業でもある。

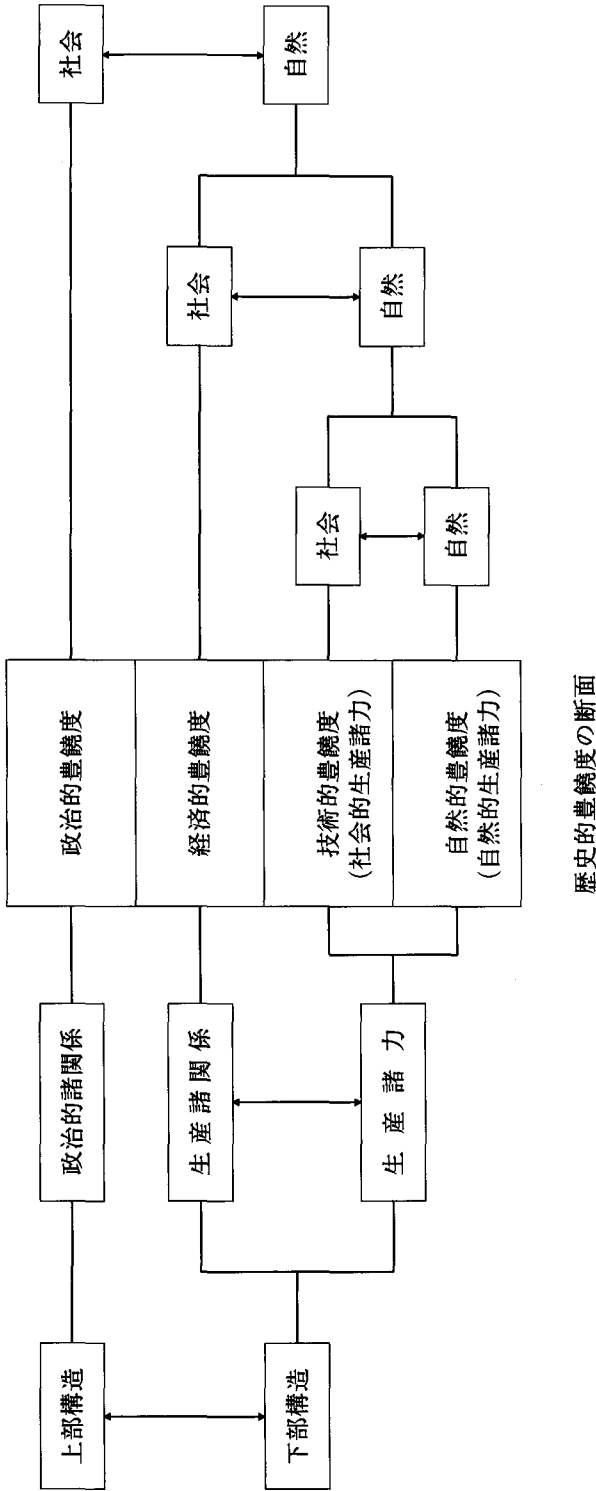
こうした試みは、その延長線上に、今日、深刻化する地球的規模の環境問題に象徴される人間と自然環境の関係に対して、社会科学（経済地理学）の側から接近する実践的課題を射程に含むものでなければならないが、これらについては、別の機会にゆずりたい。本稿での課題は、あくまでも氏が示した人間と自然、自然と社会の意味体系について、人間の存在—認識論の観点から一つの可能なテキストを汲みあげることに主眼がおかれている。

## Ⅱ 「自然」—「社会」関係の意味体系の論点整理

前章で示した課題に接近するためには、まず氏の所説に即して、「自然」と「社会」の2項対立にもとづく意味世界の構図を論点整理することが必要であろう。そのことによって、氏の体系における「自然的生産諸力」の位置づけ、すなわち、それが次第に「自然」—「社会」関係に重層的に包摂されて多義的な関係を取り結ぶ姿を明らかにするとともに、氏のもつ体系の曖昧さや不十分さを析出することにした。

氏は農業の生産手段である土地の豊饒度を引き合いに出して、「自然」—「社会」の意味体系を

第1図 川島哲郎氏の「自然」―「社会」の階層的意味体系



歴史的豊饒度の断面

- 注) 1) 川島哲郎氏が土地の豊饒度を事例に論文のなかで論理展開している「自然」と「社会」の関係に即して、筆者が独自に図化して作成したものである。
- 2)  $\leftrightarrow$  は両概念が区分される関係を表している。
- 3) 氏の論文では、「技術的豊饒度」「経済的豊饒度」は各々「経済的豊饒度」「社会的豊饒度」となっているが、「社会的豊饒度」の「社会」と「自然」関係の「社会」とが表現上まざらわしいので、無用の混乱を避けるために書き改めた。また、こうした表現の方が、氏の意図を最も適切に吸みあげたものになると思われる。

具体的に例示している<sup>4)</sup> (第1図参照)。氏によれば、「自然」と「社会」を峻別する基準は、「単なる人間対自然、すなわち主体と客体との関係」ではなく、「自然ということばの一義的、固定的な把握」は最初から問題にならない<sup>5)</sup>とし、「自然」という概念は、「敢えて象徴的な表現を用いるとすれば、それは階層的に同一な関係を常に全体として包括し、より高次の関係に対してより低次の関係をいい現すもの」<sup>6)</sup>であることが強調されている。

したがって、「土地の表面の化学的組成」「植物の栄養素からみた地面の内実」としてとらえられる農学や生物学のような自然科学の対象である豊饒度を「自然的豊饒度」と呼ぶとしても、それは経済学・社会科学の対象ではない。それが経済学の対象である「自然的豊饒度」としてとらえられるとすれば、施肥、土壌改良、灌漑排水などの人間労働の所産として眺められた「技術的豊饒度」＝「人為的豊饒度」との関係において、それが人間労働の所産ではない土地の「本源的豊饒度」であるからであるとされている。ここでいう「本源的豊饒度」「技術的豊饒度」は各々、労働過程＝「生産諸力」を構成する「自然的生産諸力」＝「自然」と「社会的生産諸力」＝「社会」に結びつくもので、後者の量的・質的拡大・比重の向上にともなって前者の制約性が減退することが生産諸力の歴史的発展ということの意味であり、したがって自然の征服、自然的環境からの解放ということの意味も、こうした「自然」や「社会」というとらえ方から明確に提示されるものになっている。

さらに、「生産諸力」を分かち「自然」と「社会」の関係は、同様に「生産諸力」と「生産諸関係」にも適用でき、「生産諸関係」の観点からとらえられる「経済的豊饒度」＝「社会」に対して、生産諸力の次元、すなわち農業労働生産性の発展状態の関係を包含した豊饒度を「自然的豊饒度」と考えることができるとしている。そこでは、「経済的豊饒度」としての土地の豊饒度が、「技術的豊饒度」の点で肥沃であったとしても、農作物の市場価格の動向如何によって耕地に参入させることもできるし、不毛な土地として耕境外に追いやることもできるという意味において、純粹に社会的な諸関係に結びつけてとらえられている。

さらに、「技術的豊饒度」が「経済的豊饒度」に対しておかれたのと同様の関係は、より高次の概念である「政治的豊饒度」にも適用できるとし、「経済的豊饒度」を「自然」なものとすれば、それに対して「政治的豊饒度」は「社会」として分離できるとともに、「経済的豊饒度」までを含めた一切の豊饒度を「自然的豊饒度」と呼ぶことができるとしている。「技術的豊饒度」「経済的豊饒度」のいずれの観点からも劣っていたとしても、たとえば政策的、軍事的理由から早くから開拓されるような場合の豊饒度を「政治的豊饒度」とし、最も高次の「社会」概念に位置するものであるとしている。

以上のような「自然」―「社会」の階層的意味世界に対する理解のもとで、氏は当面の課題である「自然的生産諸力」と「社会的生産諸力」の概念区分に焦点を絞って、ウィットフォーゲルが「自然」とみなしたものが、実は「生産諸力」に結びつく「自然」であり、そのため「生産諸力」が発展すればするほど、「自然」に人間がますます制約されるようになるというような誤謬を犯していることを明らかにしている<sup>7)</sup>。氏が論文において格闘しながら多大なエネルギーを傾注してきたのは、同じく「自然」と眺められるものであっても、「生産諸力」と「自然的生産諸力」に結びつく「自

然」とを峻別することにあつたといっても過言ではない。そのことは、「社会的生産諸力」を導き出すことによって、人間の主体性が自然環境との関係でどのようにとらえることができるのか、人間の主体性のあり方を突き止めるうえで、氏にとっては避けて通ることのできない重要な作業であつたといいうるのであろう。

しかしながら、氏が「自然」―「社会」の階層的意味世界に対して、「この点に対する透徹した理解を欠く限り、人は自然という概念を語ることは出来ない」<sup>8)</sup>というとき、はたして氏のいうように「自然」と「社会」が全体として一貫した統一的な視点から峻別してとらえられているかどうかは疑問である。たとえば「より高次の関係に対してより低次の関係をいい現わすもの」が「自然」という場合、高次とか低次というのはどのような内容のことを意味しているのか、その意味を具体的に明らかにしないかぎり、それは空虚なレトリック以上のものを何も指し示していないように思われる。「自然的生産諸力」と「社会的生産諸力」を区分するものが、労働の所産であるのかどうかという基準のように、「生産諸力」と「生産諸関係」を各々「自然」と「社会」に区分するものは何か、さらに「生産諸関係」までの関係を一切包含したものが、「政治的諸関係」に対してなぜより「自然」なものとしてとらえることができるのか、一貫した意味体系にしたがって納得のいく説明がなされているとはいいい難い。

このことを理解するうえで、氏が特に「自然的生産諸力」と「社会的生産諸力」との関係において、前者を「統御しえざるもの」、後者を「支配しうるもの」「統御しうるもの」<sup>9)</sup>、あるいは各々について「本源的」「人為的」という規定を与えていることの意義は極めて重要であり、われわれに一つの手がかりを与えてくれるように思われる。この規定を素直に受け止めれば、「統御しえざるもの」ということの意味が、常に「統制しえざるもの」で人為による変更がまったくきかない本源的なものであるということになる。にもかかわらず、人間による自然環境に対する支配・征服が可能だとされるのは、「統御しうるもの」によって「統御しえざるもの」の領域が相対的に狭められるからであり、「統御しえざるもの」は人間の登場以前には「存在」しないという「関係」論的文脈において理解し、「存在」それ自体の「意味」を人為によって積極的に「統御しうるもの」へと歴史的に変化させることができるということにほかならない。あるいは、「統御しえざるもの」の「存在」を人為によって、人間にとってまったく影響をもたない「無意味」なものにしてしまう以外に、人間の自然環境に対する統御を考えることはできない。氏が「社会的生産諸力の発展、自然的生産諸力の相対的後退が常に人類の自然支配を意味する」という場合、たしかにこのような「意味論」的な観点から深く理解されなければならないし、後述するように、実際、氏はこうした観点から論議を展開している。

以上のことをさらに敷衍すると、「統御しえざるもの」はあくまでも人間にとってそうなのであって、どこまでも人間の認識によってその「存在」が浮かびあがってくるものと考えることができよう。すなわち、人為による統御の歴史的過程で、これまで「統御しえざるもの」が「非実体」化したり、また新たに「統御しえざるもの」を「実体」化させたりすることのなかに、「統御しうる」存在としての人間の主体的な「関与性」をみることができる。

このようにみると、「統御しえざるもの」としての「自然」は、現実には人間の積極的な「関与性」・「関係性」＝「社会」によって「実体化」したものであるにもかかわらず、まさに「統御しえざるもの」として、逆に人間を支配し拘束するものとして「存在」しているのがわかる。これは、広い意味での「物象化」「フェティシズム」<sup>10)</sup>という状態を示していると考えられ、本稿における次章以降の考察において、「自然」や「社会」のこうした一貫した統一的な語法のもとに、氏の意味体系を整序し直すことを通して、その具体的な分析を試みることにしたい。

### Ⅲ フェティシズムとしての「自然」―「社会」の意味世界

この章では、前章で「物象化」「フェティシユ」の文脈において提起した「自然」や「社会」の概念をさらにたしかなものにするために、氏が土地の豊饒度を例に示したように、「自然」と「社会」の同一の関係を全体として階層的に包含した意味体系に即して考察を加えることにしたい。

「自然」というものを「フェティシユ」の観点からとらえる見方は、氏の論文から直接探り出すことはできないが、そうした見方がまったくなかったわけでは決していない。たとえば、氏は、生産諸関係の観点から把握された「経済的豊饒度」を、より低次といわれる「技術的豊饒度」＝「自然」に対しては「社会」に結びつけて区別する一方で、より高次であるとされる「政治的豊饒度」＝「社会」に対しては「自然」なものとして眺めることができるとしている。そして、「経済的豊饒度」あるいは「経済的豊饒度」までを含めた一切の豊饒度を「自然」なものとする場合の理由として、脚注において、「このいみに用いられた『自然』という表現の類例として、例えば価値法則をもって自然法則と呼ぶ場合の『自然』を挙げることが出来ないであろうか」<sup>11)</sup>と述べられている。以下では、この脚注にみられる「自然」という概念を手がかりにして、それを明らかにすることを通して、氏の意味体系における一貫した「自然」「社会」という語の用いられ方を検討することにしよう。

氏がいうように価値法則が自然法則と呼ばれるのは、価値法則が諸個人の意識から独立した客観的なものとして自然法則のように諸個人を拘束・支配するからであり、経済活動が商品経済の内在的論理によって自立的に運営されていることを前提としている。周知のように、価値法則が貫徹する社会とは、労働生産物が商品となって使用価値と「価値」の二重性として示される社会であり、その貨幣量で表示される「価値」が商品の「等価」関係を通して相互に交換されることを原理としている。すなわち、それは、すべての経済活動が「価値」＝「貨幣」を中心に編成される社会であり、その「等価」交換原理にもとづいて、「価値」＝「貨幣」が諸個人にとって「統御しえざるもの」＝「自然」なものとして諸個人を支配している社会のことである。

しかし、価値法則が自然法則と本質的に異なる点は、それが人と人との社会関係（生産関係）によって作り出されたものであるかぎり人為的・歴史的に変更可能なものであるということである。にもかかわらず、価値法則が諸個人の意識から独立した客観的なものとして、あるいは「統御しえざるもの」として、諸個人にごく「自然」＝自明なものとして映ずるのは、「価値」が商品それ自体に何か客観的に内在するものとしてつかまえられていることに起因している。いうまでもな

く「価値」は、商品と商品の「社会」関係においてのみ立ち現れるものであり、その意味では、感覚的に手で触れる物体のようにはつかまえることが不可能な純粋に「社会」的なものである。

このように商品と商品の「社会」関係、もとをたせば私的所有と社会的分業にもとづく人と人の関係にしかすぎない「価値」が「物象化」するのは、「価値」の現象形態である。「交換価値」がその「一般的等価形態」である「貨幣形態」によって覆い隠されているからである。換言すれば、一商品にしかすぎないにもかかわらず、「貨幣」が商品世界から不可避免に出現し、他のすべての商品の「価値」を表現するようになると、あたかも「貨幣」そのものがそのうちに「価値」を内在させるものとして独立に運動することになり、「貨幣」を手段に表現される個々の商品も、それ自体のなかに「価値」が客観的に存在するかのように錯視され、商品相互の関係を現す「交換価値」が見えなくなってしまうのである。「貨幣形態」は数量的表現でもって商品「価値」を計測するので、なおさら商品の「価値形態」は隠蔽されてしまうことになる。

「貨幣形態」において、商品の「社会」関係である「価値形態」が最高度に「物象化」＝「フェティシユ」するのは、「貨幣」が出現するまでの「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」から「全体的な、または展開された価値形態」、さらに「一般的価値形態」に至るまでのプロセスをすべて覆い隠してしまうからであると考えることができる。そのことは、逆にいえば、「貨幣形態」がまったく「統御しえざる」ごく平凡な事実として現出する段階において、初めてうえで示した「価値形態」の展開序列が問題となり、「貨幣形態」を煎じ詰めて、相互に異なる使用価値をもつ商品と商品の関係、さらにはそれを担う人と人との社会関係にまで立ち返ることができるといってもよい<sup>12)</sup>。そして、こうした「物象化」現象は、自然法則のように対象を外から観察して現れるのではなく、商品世界に関わっている諸個人自身の日常生活において、「統御しえざるもの」＝「自然」なものとして現れるところに、その特徴がみられる。

以上にみられるテキストは、マルクスが『資本論』において「商品」の「価値形態または交換価値」のところで詳細に論じた箇所から吸みあげることができるので、これ以上深く立ち入らないことにする。ここでは、価値法則との関連で、氏がいうところの「自然」が「統御しえざるもの」として、「統御しうるもの」としての「社会」＝「関係」が「物象化」、あるいは「関係」との対比でいえば「実体化」した事態としてつかまえられるという点を押さえておけばよい。すなわち、氏が「経済的豊饒度」が「社会」という観点から眺められるという場合の「社会」は、マルクスが人間の本質は「社会的諸関係の総体」というときの「社会」であり、それを覆い隠すものが、人間と人間の「間」、相異なる使用価値（商品）と使用価値（商品）の「間」から生み出されて「実体」視される「価値」（貨幣形態）であるという理解のうちに、氏が「経済的豊饒度」が同時に「自然的豊饒度」と規定することの積極的な意味を見出だすことができるものと思われる。

このように氏が「経済的豊饒度」に対して用いた「自然」や「社会」の意味を考えると、より高次の概念とされる「政治的豊饒度」が、「経済的豊饒度」あるいは「経済的豊饒度」までを含めた一切の豊饒度に対してより「社会」的であると主張される意味も自ずから理解されるであろう。

「経済的豊饒度」のなかに読みとることのできる「社会的諸関係の総体性」が、価値法則を媒介に

事後的にしか立ち現れないのに対して、「政治的豊饒度」をつくり出す「政治的諸関係」においては、それがあらかじめ諸個人によって自覚的に制御できるものとして直接的に現れるからにはほかならない。

すなわち、これまでの文脈にもとづけば、「経済的豊饒度」のうちに示される「社会的諸関係」は、諸個人にとっては、価値法則を貫徹させるメカニズムを通して迂回的に認識され、したがって客観的存在として結果的に対象的に「実体」視されるほかはなく、「政治的諸関係」のように「関係」そのものが諸個人の意識のうちに透明性をもっては存在しない。「関係」そのものが直接的な透明性をもって現れるからこそ、「政治的諸関係」はそれを担う人々によって自覚的に制御できるのであって、そのことはまた、主体的に創出される政治的支配秩序が恣意性をともなったものになる、あるいは恣意性をともなったものにならざるをえないということを意味しよう。氏が「政治的豊饒度」から「経済的豊饒度」を分離する理由として、「甲地は乙地に対して経済的豊饒度（この論文では技術的豊饒度）の観点からも、社会的豊饒度（同経済的豊饒度）の観点からも、劣っているにも拘らず、政策的、軍事的理由からより早く開拓され、より高い豊饒度をもつ」というような場合を例にあげているのは、うえのような脈絡から理解する必要があるし、また可能であろう。

ところで、「経済的豊饒度」までを含めた一切の豊饒度＝「自然」、「政治的豊饒度」＝「社会」という2項対立図式は、一般に「下部構造」（物質的生産をめぐる経済的諸関係）と「上部構造」（社会的意識・観念諸形態）の関係を反映したものとして考えることも可能であるにちがいない。こうしたとらえ方は、氏の用いる「自然」や「社会」の意味を、さらに首尾一貫した方法のもとにより深く豊富化するうえで有効であろう。

市場経済が全面的に支配する資本主義社会にあっては、土台としての下部構造が商品経済の内在的論理で自立的に展開し、行政・政治、宗教的権威、道徳、学問・思想、芸術といった、広く「社会的意識形態」に関わる上部構造は相対的に独自の領域として形成される。それ以前の社会においては、上部構造と下部構造とは明確なたちで分離することができず、上部構造によって表象される世界に下部構造が組み込まれたり、下部構造が上部構造によって生み出されたり、一般に両者が融合したものとして「社会」が編成され秩序化されていたと考えることができる。そうした社会にあっては、第三者的な観察者の立場からはともかく、そこで生きる人々にとっては、下部構造と上部構造との分離は日常性においては現れない。したがって、「社会」が下部構造と上部構造とにはっきりと分節化して認識されるのは、「社会」から「経済」が抽出されて、「社会」が「経済」＝「市場経済」の論理そのものによって秩序化し、それにともなって、上部構造もまさに「経済外的領域」として独自の分化を遂げるからであるといえよう<sup>13)</sup>。

しかし、「経済外的領域」としての上部構造はそれ自体多元的かつ恣意的に形成されるが、下部構造の内的秩序にとって不可欠であるかぎり、たしかに下部構造を合理化・正当化・追認したものにならざるをえず、「統御しうるもの」として日常ごく自明に思われている「社会的意識形態」も「統御しえざるもの」＝「自然」として「物象化」の視界においてとらえることができる。うえのようなとらえ方をすると、「政治的豊饒度」の関係において最高次の「社会」性をもつとされる氏の

見解は、氏の意味体系において、それが同時に、最高次の「社会」性を示すがゆえに最高次の「自然」性を示すという理解に自ずと導かれることになるであろう<sup>14)</sup>。したがって、「物象化」した視界においては、「政治的豊饒度」までのすべての豊饒度、氏の提示する豊饒度の全体系は「自然的豊饒度」として眺めることができるとともに、「物象化」の根底には「関係」＝「社会」しかないという考え方からは、すべての豊饒度は、人為＝「関係」によって創出されたという意味では「社会的豊饒度」とみなすことも可能であろう。

さらに重要なことは、これまでの議論からも明らかなように、「自然」と「社会」という同一の関係を包括した氏の重層的意味体系は、価値法則が貫徹する資本主義経済社会という特殊歴史的な段階において、初めてその姿が現れて成立するのであって、「社会」を客観視することが意識にのぼらない「社会」にあっては、「自然」と「社会」という2項対立そのものが問題とならない。氏が示した意味体系において「自然」と「社会」の関係が「下部構造」と「上部構造」、さらに「下部構造」を「生産諸力」と「生産諸関係」に分節化して認識されていること自体、資本主義経済社会という歴史的に「物象化」された「経済」の構造分析を通してのみ、初めて明らかにされうるのであって、それらがアприオリに「実体」として存在しているわけでは決してない。それらが根源的に「関係」＝「社会」を覆い隠して「実体」視されるからこそ「意味」で囲い込むことができるのであり、したがって「自然」や「社会」の意味も浮き彫りにされるのである。

氏が自然科学とは異なって経済学の対象である土地の豊饒度は常に歴史的豊饒度でなければならないというとき、われわれのテキストに従えば、それは以上のような観点から理解する必要があるだろう。

これまで、もっぱら「経済的豊饒度」「政治的豊饒度」を中心に考察を試みながら、氏の意味体系において用いられている「自然」や「社会」の概念・内容を明らかにしてきた。しかし、「経済的豊饒度」＝「生産諸関係」と「技術的豊饒度」＝「生産諸力」の関係において、どのように後者がより「自然」なもの、すなわち「物象化」の相においてとらえることができるのかということについては<sup>15)</sup>、ほとんど議論を展開しないままであった。この点についての説明は、氏の論文の中心的な課題―自然環境からの人間の解放とはどういうことか―の解釈をめぐる問題とも密接に関係するので、章を改めて積極的に論及することにした。

#### Ⅳ 自然環境の存立と人間の言語活動

氏が人間の自然環境からの解放ということを問題にし、それに明快な解答を与えることができたのは、両者を媒介とする労働・生産過程＝「生産諸力」を「自然的生産諸力」と「社会的生産諸力」とに峻別し、「自然環境」を「自然的生産諸力」に結びつけて、それが人間労働の所産である「社会的生産諸力」の「発展」によってますます後退させられるというとらえ方を導き出すことができたからであるといえる。そのことは、「自然的労働対象であれ、自然的労働手段であれ、総じて自然的生産諸力は、社会的生産の進展と共に、不断に生産過程内部における主導的な地位から追われ

て、ますますみすばらしい役割を振当てられて行く<sup>16)</sup>という氏の論文の一文において、明瞭に示されている。

すなわち、氏にとって、人間の自然環境からの解放という命題は、労働の所産でない「自然的生産諸力」が「統御しえざるもの」として実在するけれども、どこまでも「社会的生産諸力」を形成する人間労働がその「意味」を「変化」させることによってのみ、その生産過程に対する制約・拘束性を歴史的に減退させていくことができるという理解のうちにある。そして、氏は人間の自然環境に対する主体性が、「自然的生産諸力」の「意味」を「変化」させることのなかに積極的にみることができるとして、次のように述べている。少々長くなるが重要なので引用すると、「その（自然的生産諸力）変化は、それ自身の発展の結果ではなくて、ただ生産諸力に包摂される限りでの変化、換言すれば、社会的生産諸力の発展の反映としての変化にすぎない」、さらに続いて「例えば既存の自然的生産諸力の外延的な拡張は、従前の社会的生産諸力の量的拡充の結果であろうし、新しい自然的生産諸力の登場は、一連の科学的発明、発見とその応用設備の出現を挨って実現する。のみではない。同一の自然的生産諸力のもつ能力そのものが、専ら社会的生産諸力の性能に依存して変動することは、吾々の日々体験するところである。」<sup>17)</sup>としている。

以上のような氏の見解、いわゆる「自然的生産諸力」＝「自然環境」といわれるものの「存在」が「社会的生産諸力」によって「意味」を付与されて出現するということを首肯するとすれば、人間の自然環境による制約・拘束性それ自体も、当然、「社会的生産諸力」によってその「存在」が喚起されたものとみることができるであろう。すなわち、「社会的生産諸力」に先立って人間を制約・拘束する「自然的生産諸力」が「存在」するのではなく、逆に「社会的生産諸力」の「存在」を前提にして、初めてそのことが「意味」をもちうるのであって、決してその逆ではないということである。人間の認識以前の裸の客観的な「自然的生産諸力」、さらに「生産諸力」に「自然的生産諸力」として包摂される「自然物」＝「客体」などは存在せず、したがって自然環境が人間を制約・拘束するという場合、その制約・拘束ということもアプリアリに存在しているわけではない<sup>18)</sup>。

対自然環境との制約・拘束性という関係が人間にとって「意味」をなすのは、それを乗り越える契機をその「意味」自体のうちに見出だしているからであり、それを、「無意味」なものに変えて、その「存在」を喚起しないようにすることのなかに、うえの氏のテキストから導き出される自然環境に対する人間の主体性というものを考えることができるであろう。さらに、「意味論」として、人間の主体性というものをもっとダイナミックにとらえるとすれば、人間は、対自然環境の制約・拘束性という「意味」を積極的に創出し、それを推進力に「社会的生産諸力」を量的・質的に発展させた結果、また新たなそうした「意味」をつくり出すことによって「社会的生産諸力」をよりいっそう発展させるといった、対自然環境との「間」に「意味」を絶え間なく生成し創造していく過程として描くことができるであろう<sup>19)</sup>。

繰り返していえば、本来、労働の所産でない「自然的生産諸力」が「統御しえざるもの」として「存在」するのは、どこまでも「社会的生産諸力」の一定の歴史的な「発展」段階との関わりでその「意味」が見出だされるからであって、そこからの解放もまた、「社会的生産諸力」の発展を媒

介に、人間にとってその「存在」を「存在」たらしめないものにする人間独自の積極的な「意味」創出行為に求められるという、そうした不断の過程において、対自然環境との関係で人間の主体性をみるというのが、うえの引用した文章から導き出される氏の一貫した立場と考えることができる。そうではなく、「自然的生産諸力」が「統御しえざるもの」として人間の認識以前に客観的に厳然と存在しているという考え方を支持するとすれば、それに立ち向かう人間の主体性などはまったく問題にはならないはずである。人間の主体性が考えられるにしても、それは「自然的生産諸力」に恒常・不変的に制約・拘束されたものにならざるをえず、自然環境からの人間の解放などといった考え方は到底出てくるはずもない。そのことは、氏が論文のなかで例としてあげているように、「いかなる発展段階においても、所詮人間にとっては天与のものでしかない」対象＝「自然的労働対象」の採取・抽出を常に直接の目的とした鉱業の場合を想定してみただけでも明らかであろう<sup>20)</sup>。いうまでもなく、その場合でも、「自然的労働対象」は人間の認識の網を通してのみ「実体」化・「客観」化したものであって、アプリアリに「実体」として存在しているわけではない。

「自然的生産諸力」が即自的に「存在」にするという考え方に陥らないためにも、「社会的生産諸力」の発展にともなって形成される人間の意味世界が前提となって、さまざまな「自然的生産諸力」＝「統御しえざるもの」が「意味」としてその「存在」を初めて表出するものであるからこそ、その「存在」もまた、人間の意味創出行為を媒介に異なった「意味」をもった「存在」に歴史的に「変化」させることができるということは、いくら強調してもしすぎることはないであろう。

しかしながら、先に引用した氏の言説にしたがえば、「社会的生産諸力」（人間の労働行為）の出現をまって「自然的生産諸力」が「意味」としてその「存在」が生成され、そのことによって人間の自然環境からの解放が保障されるという、うえのようなテキストが引き出されるにもかかわらず、自然的生産諸力と社会的生産諸力の関係を考察した別の箇所では、それがまったく逆転した関係として語られているかのような印象をもつ表現がみられる。このことは、「自然的生産諸力」というものをアプリアリに「存在」する「実体」として考えるのか、それとも人間の「意味」創出行為との関連で「関係」概念としてみるのかという、いわゆる人間の認識における「実体」論的、「関係」論的な両者のとらえ方の本質的な違いが、氏の思索のなかで明確になされていないことを意味するといつてよい<sup>21)</sup>。というよりは、後でも述べるように、氏が「関係」論的な一貫した認識にもとづいて、人間の主体性が「自然的生産諸力」をとらえるダイナミックな過程を、その「意味」が生成される現場に立ち会って、その「存在」が表出される過程として論じえなかったであろう。

そのことをもっとよく示しているのは、次のような記述である。また多少長くなるが、氏の自然的生産諸力と社会的生産諸力の関係を特徴的に反映するものとして重要だと思われるので引用すると、「まず第一に自然的生産諸力は社会的生産諸力に対し、生産諸力の中でより基礎的な位置を占める。いう意味は、自然的生産諸力に表現される関係は、社会的生産諸力の出現を挨つまでもなく、歴史的にも実在しえたが、逆に自然的生産諸力を欠いた、単なる社会的生産諸力は之を考えることが出来ない」、あるいは「然しながら第二に、生産諸力のより本質的な、純粋な側面をなすものが、自然的生産諸力ではなくて、社会的生産諸力であるという逆の関係が忘れられてはならない。成程

形式的には、自然的生産諸力は社会的生産諸力に、理論的、歴史的に先行し、したがってそれ自身単独に実存しうるものであったが、然し単独で存在する自然的生産諸力は、もはや生産諸力の名を冠するに値しない関係にすぎない」(特に傍点に着目)としている<sup>22)</sup>。

うえの引用文に示される「社会的生産諸力の出現を待つまでもなく、歴史的にも実在しえた」とか「自然的生産諸力は社会的生産諸力に、理論的、歴史的に先行」という記述は、その通りの意味に受け止めれば、たしかにわれわれが前に引用した氏の言説から汲みあげたテキストとは相容れないものである。しかし、氏のこの表現が、人類の黎明期における生活資料獲得の推移の歴史的過程を氏が第三者的な立場で観察して記述したことを考えれば、当然、ここにいう「自然的生産諸力」は、過去に「意味」を付与されて「実体」化・「客観」化し、すでに歴史的事実としての重みをもった性格のものとして登場しているとみることができる。このかぎりにおいて、現在の時点からみて、この表現それ自体はくすでに構成された意味世界>＝<物象化の世界>のなかでは歴史的事実として正しく認識されているといえるであろう。「自然的生産諸力は社会的生産諸力に歴史的に先行」という錯視がなされるのは、前者が労働の所産でない「本源的」なものであるという理解にもとづいているからであろうが、前者は後者の「人為的」な労働過程があって初めて「意味」をもちうるのであって、前者が単独で「意味」をもって「存在」するわけではない。「労働」という「意味」が最初にあって「労働の所産でないもの」が「意味」として分節化されるのであって、したがってその「存在」が立ち現れるのである。いったんその「存在」が表出されてしまえば、それが既成の事実として制度化され、「労働の所産でないもの」から「労働の所産」が生み出される歴史的過程についての知識が、当然のごとくわれわれを拘束することになる。

このように「自然的生産諸力」の「存在」が、どれほどアプリオリに「存在」する「実体」として錯視されようとも、その「存在」が人間独自の「意味」を媒介とする「認識」活動と密接不可分にあること、すなわちそれを「関係」概念としてとらえないかぎり、われわれは生産過程における自然的生産諸力の相対的地位の低下とか、人間の自然環境からの解放ということの深い意味を知ることとはできない。このことを明確に意識していたかはどうかは別として、うえの引用文に続いて、氏は次のように「自然的生産諸力」の「存在」が「社会的生産諸力」との関係で「意味」をもちうることをはっきりと表明してはいる。「それ自体としては単なる動物的な関係にすぎないものを、人間的な関係に包摂し、単なる自然物に生産諸力の構成要素たる性格を附与するものは、社会的生産諸力に外ならぬ。社会的生産諸力のもつこの純粹生産力的な性格は、社会的生産諸力と自然的生産諸力との統一概念たる広義の生産諸力が同じ『社会的生産諸力』なる名を以て呼ばれる事実、最も端的に示されている」<sup>23)</sup>。

ところで、「自然的生産諸力」をどこまでも「関係」概念としてとらえ、「実体」論的思考との無用の混乱・混同を避けようとすれば、われわれは人間の主体性・能動性の本質が労働行為とともに、人間の言語活動＝シンボル化能力にあることをも積極的に射程に入れる必要がある<sup>24)</sup>。すなわち、これまでのテキストからも容易に察せられるように、人間による対自然環境の統御について、人間の「意味」創出行為との関連で明らかにしてきたが、そのことは「ホモロクエンス＝言葉を操る動

物」としての人間の存在を抜きにしては論じることができない<sup>25)</sup>。氏は「社会的生産諸力」の本質を「道具を作る動物」として人間の労働・生産過程に求めているが、それを「言葉という道具」を用いての外界への「意味」作用を通じた働きかけとその再編成という視野にまで広げたものとして明確にとらえなければ、氏の論文の論理展開を充分汲み取ることはできないし、その一貫性も保障されないのではないと思われる。これまで機会あるごとに論じてきたように、「自然的生産諸力」が「関係」概念であり、「意味」であると同時に「存在」でもあるということを理解するためにも、言葉＝言語記号に関する深い洞察が不可欠であろう。

対自然環境の制御に関わって、「自然的生産諸力」の「意味」がどのように生成し変化するのかといったことを問題とするわれわれにとって、言葉＝言語記号の機能を、どこかに事物＝オリジナル（「実体」）なものの「存在」を前提にして、それを反映し表現する記号＝コピーとしてとらえ、たんなる事物の名称を指すコミュニケーション手段として考えるわけにはいかない。F. ソシユールの言語学が明らかにしたように、いかに事物が「実体」的様相を呈していても、それが「意味」を付与されることによってその「存在」を同時に喚起し、それ自体まったく即自的な根拠をもたないことを暴くようなものとして、われわれは言語記号のもつ機能の特質を把握する必要がある。いわゆる言語記号の機能を「存在」しないものを現実的に「存在」せしめて、外界の世界を分節化・「実体」化させる言語記号のもつ「象徴」・「意味」作用機能に着目して、氏のいう「自然的生産諸力」が言語の恣意性にもとづく「非実体的関係」としてとらえられるがために、その「意味」の否定・変更もまた可能になるということを理解することが、何よりも重要である。

ソシユール言語学によれば、人間特有のランゲージュ（言語能力）活動は、意味生成・発生の場において、一切の象徴・シンボル化が言語表現とともに初めて「意味」を「存在」せしめて事物（あるいは観念）を「表出」するものとして、シニフィアン（意味するもの＝表現）とシニフィエ（意味されるもの＝意味・内容）が一体不可分離なもの（シーニュ）として考えられている。そして、世界を分節化・差異化するものとしての言語記号は、「示差性」「否定性」「形相性」の性質を基礎とする「差異の体系」であるがゆえに、まったく根拠をもたない恣意的なものであり、したがって事物（あるいは観念）も無根拠性を原理とする「関係」「差異」の「間」「結節点」に生み出される「存在」にしかすぎないことを徹底的に明らかにしている。このことを見極めることによってソシユールは、普遍的な「実体」として考えられている一切の文化・価値の総体がフェティッシュであるということを解明する途を開いた。ソシユール研究の第一人者でその思想を独自の人間存在一認識論にまで昇華させた故丸山圭三郎氏は、動物一般がもつ生体＝感覚・運動によるそれぞれの種固有の環境＝世界分節化構造を「身分け構造」と呼び、それを人間存在にとって「過剰」な言葉によって意味構成された「言分け構造」から峻別して、前者が後者をもったがゆえに破綻したという仮説を提示し、「存在」しないものを言分けた瞬間から動物と断絶し、文化的秩序の世界が生み出されたことを強調している。

川島氏のいう「自然的生産諸力」に冠せられている「自然」、どれほど「自然」なものとしてわれわれの目に映ろうとも、人間に「自然」と呼べるものがあるとすれば、それはうえにいう「身分

け構造」によって分節される世界においてほかはない<sup>26)</sup>。氏のいう「自然」が「言分け構造」に操作されたフェティシズムであることを暴くことこそが、氏の「自然」という語の一貫した用い方を理解することによって決定的に重要であるというのが、われわれの試論から導き出されるささやかな問題提起である。

## V 結びにかえて

以上、本稿では、氏の論文に豊かに紡がれているテキストを引き出ししながら、氏の「自然」―「社会」の意味体系を検討し、できるかぎり「関係」論的な一貫した統一的視点から再編成を試みてきた。

「実体」論的思考を排し、氏の「自然」概念を「関係」的存在としてとらえようとしてきたのは、氏の論文が、皮相な見方をする者にとっては、人間の本質的側面としての「社会的生産諸力」が「統御しうるもの」として拡大するにつれ、自然環境から人間が解放されていくという、生産力至上主義や科学技術万能主義を礼讃する楽観論に陥り、また、逆に、そのことの反動として、「自然」に帰れ式の短絡的思考で人間文化を否定するといった立場に通ずる見解が出てくる危険性を常にもっているのではないかという問題意識にもとづいている。

いうまでもなく、それらはいずれも「自然環境」をアプリアリに存在する客体としてとらえることでは同じであり、主体と客体の2項対立図式にもとづいて、主体が客体を正しく反映・認識できるというロゴス中心主義の発想である。本稿では、言語表現が、「自然環境」＝「自然的生産諸力」がその「意味」を「存在」せしめる人間の創造的行為であり、それが「差異の体系」（言語の恣意性）を原理とする「関係」＝「社会」にしかすぎないことを明らかにすることを通して、対「自然環境」の人間の主体性・能動性ということの意味を検討してきた。しかし、紙幅の制約上の問題、直接の課題としていなかったという事情があったとはいえ、多方面にわたる言語論・記号論の研究成果を踏まえたうえでの十分な議論とは到底いえず、本稿では骨格を素描したにすぎない。それらのことは今後の課題としたい。

最後に、「自然環境」が「関係」論的存在であり、したがって氏が克服をめざした「自然環境決定論」「地理的唯物論」といわれるものが、＜すでに分節化された意味世界＞における、硬直・情性化した主体（人間）と客体（自然）の「実体」的2項対立の関係であることをもっともよく象徴的に示していると思われる、次の和辻哲郎の一文を引用しておこう。「我々は寒さを感じる前に寒気というものの独立の有をいかにして知るのであろうか。それは不可能である。我々は寒さを感じるにおいて寒気を見いだすのである。しかもその寒気が外にあって我々に迫り来ると考えるのは志向的關係についての誤解にほかならない。元来志向的關係は外より客観が迫り来ることによって初めて生ずるのではない<sup>27)</sup>。

## 注

- 1) 重量感溢れるこの論文の内容を咀嚼して簡潔に描いたものとして、この論文を発表した4年後に刊行された論稿、「生産諸力と地理的条件」(多田文男・石田龍次郎編『生産の地理』現代地理学講座第7巻、河出書房、1956年所収)があるので、是非とも参照されたい。
- 2) 以下の議論に示されるように、自然環境から人間が解放されるということの意味に明解な解答を与えたことによって、その後、氏の経済地理学研究が自然環境、あるいはその地域性(局地性)からの制約性という課題に拘泥することなく、人間が支配・統御できる「社会的生産諸力」それ自体が形成する地域性(地域問題)を経済法則との関連で問題にすることが可能となり、今日に至るまで一貫して、その生成・発展・消滅の歴史のプロセスの具体的な分析を地域政策の理念との対比で追究し得たことの意義は大きいと考えられる。こうした一連の研究のなかでの1つの到達点を示す代表的な氏の業績として、数あるなかで、「地域間の平等と均衡について」『経済学雑誌』第79巻第1号、1978年をあげることができよう。
- 3) 特に戦前、戦後の間もない時期に、いかに人間と自然環境の関係が重要な課題であったかを示すものとして、たとえば鴨沢巖「経済地理学の項目立てについて」『経済地理学年報』Vol. 2, 1955年、佐藤元重「わが国における経済地理学の発達—方法論を中心に—」『経済地理学年報』Vol. 3, 1956年。
- 4) 川島哲郎「自然的生産諸力について—ウィットフォーゲル批判によせて—」『大阪市大経済学年報』第2集、1952年、pp. 69~75。

以下の議論において、氏の論文中使用されている「経済的豊饒度」と「社会的豊饒度」概念の理解を容易にするために、各々「技術的豊饒度」「経済的豊饒度」に表現を書き改めた。その理由は、表現上の無用の混乱を避けるということと、このような表現にした方が、氏の意図を最もよく汲みあげたものになると考えられるからである。実際、かつては筆者は、氏からこうした表現に書き改めた方がよいという教示を得た。

- 5) 同上論文、p. 69。
  - 6) 同上論文、pp. 71~72。
  - 7) このことをもっとも端的に表した一文(同上論文、pp. 67~68)として、「一様に自然力と呼びならされていることの意味を顧ることなしに、『自然的生産諸力、すなわち石炭、蒸気、金属、電気のエネルギ』というように、『自然力』と『自然的生産諸力』とを結び付けるとしたら、一体吾々は社会的生産諸力などというものを考えることが出来るであろうか」。
  - 8) 同上論文、p. 72。
  - 9) 同上論文、p. 92。
  - 10) 「物象化」に関する研究の第一人者は廣松 渉氏であるが、ここでいう広義の「物象化」とは、丸山圭三郎氏がF. ソシュール言語学モデルにしたがって、言語のもつ無根拠性・恣意性が生み出す一切の歴史的・社会的価値＝「非自然的価値」が超越的存在として拘束力が生ずるという場合の意味として用いている。氏は、廣松氏との共著である「記号の世界と物象化」(情況出版、1993年、pp. 73~74)において、次の3つの層に分けて「物象化」を広くとらえている。「第一に、自然的な実在と普通言われているような次元にかかわるコグニティブな場面での物象化。第二に、広い意味で制度と言われているような次元、つまり、規範的コードと制度的構造態とを包括した実践的な次元での物象化。第三に、価値と言われているような次元、つまり真善美といった文化価値プロパーを包括した次元での物象化」。
- なお、本稿に関わって、「物象化」について参考にした文献としては、真木悠介『現代社会の存立構造』筑摩書房、1977。
- 11) 前掲論文「自然的生産諸力について」p. 71。
  - 12) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』講談社、1978年、特に pp. 30~31。
  - 13) このことに関連して、橋爪大三郎氏は、社会空間の分解可能性にもとづいて、経済をはじめ政治・法・科学が相対的に独立した領域として分化したことによって、19世紀の西欧近代市民社会において、社会諸科学が普遍性をもちえるものになったということを「言語」派の立場から明らかにしている。橋爪「社会空間の分節と重層」橋爪他編著『試される言葉』JICC出版局、1991年を参照のこと。
  - 14) このことの意味は、政治・権力などの「社会的意識形態」が「社会」の存立構造を成り立たせている始源的な「言葉」と不可分であり、というよりは「言葉」そのものであるという点でもっとも「社会」的なものとみなされうが、それは、「物象化」した土台である「経済構造」を反映して合理化・正当化され、一元的なイデオロギー支配機能を発揮したとき、もっとも「自然」なものとして「物象化」された相において眺められるという事態を指している。
  - 15) 生産諸力を体現した「使用価値」を考えてみると、「価値」との区別を際立たせるために「自然的な属性」と

いう取り扱い方をしているのであって、それが人間の「言語」による「意味」作用を媒介にして、すぐれて「社会的」な性格をもっていることは、次章でみる通りである。このことと関連して、使用価値がどれほど自然的・客観的なものとして目に映ろうとも、それが価値であるかぎり、社会関係の産物であり、現代社会においては、いっさいの使用価値＝〈物〉が〈記号〉となって「関係」としてのシステムに帰属していることをJ. ボードリヤールは告発している。J. ボードリヤールの次の一連の研究成果も合わせて参照のこと。『物の体系』(1968年)、『消費社会の神話と構造』(1970年)、『記号の経済学批判』(1972年)、『生産の鏡』(1973年)、『シミュラークルとシミュレーション』(1981年)。

- 16) 前掲論文「自然的生産諸力について」、p. 88

- 17) 同上論文、p. 89

- 18) たとえば、寒暖という気候条件が人間の生活に影響を与えるという場合を考えてみた場合、寒気や暖気というものはアприオリに「存在」するものとしてとらえることができるだろうか。今、ストーブという労働生産物を使って部屋を暖めたとき、部屋の外部の空気はよりいっそう寒く感じるようになる。この寒気の「存在」は「意味」としてつくり出されたのであって、先験的に「存在」するわけではない。温暖計(労働生産物)を用いて、寒気が数値で計測されたとするなら、寒気の「存在」は、さらに科学的・客観的な「存在」となるであろう。寒気というものは、どのようにも「意味」を「変化」させ、その「存在」が浮かびあがってくるものとして考えることができる。

- 19) ここにいう「意味」を近代経済学の「希少性」概念としてとらえることも可能なのではないだろうか。もしそうだとしたら、L. ロビンズが『経済学の本質と意義』(中山伊知郎監修・辻六兵衛訳、東洋経済新報社、1956年)のなかで、経済学の統一的な主題が「希少な手段の処分にさいして人間行動のとる諸方式」に関わる研究にあるとし、そして、それが今日なお近代経済学の堅固な普遍的原理となっているのは、人間が「意味」＝「欲望」をつくり出さずにはをれない存在であるということと決して無関係ではないからであると思われる。

- 20) 前掲論文「自然的生産諸力について」p. 66。

- 21) A. シュミットが『マルクスの自然概念』(元浜清海訳、法政大学出版局、1972年、p.113)のなかで述べた次の一文は、人間の自然環境からの解放にとって、「自然」を「実体」論から「関係」論への視座転換を図ってとらえることの意義を示したものとして興味深い。「自然が認識論的に、次第にたんに『与えられたもの』としてよりも、むしろますます『作られたもの』として現れるようになるのは、中世社会からブルジョア社会への経済的移行にともなう現象である。自然過程への組織的干渉が包括的になればなるほど、ますます客観的構造の受動的模写に尽きるような認識の概念は不十分であることが明らかになる」。

これに対して、吉田文和氏は、「前提としての自然、自然の外存性を承認することは唯物論の第一の原則であることはいうまでもない」(『マルクス主義における自然・人間・技術』『経済学研究』第29巻第4号、北海道大学、1979年、p. 72)としているが、これは本稿の立場とは相いれない。科学史・科学哲学を専門とする村上陽一郎氏は、本稿でいうような「関係」論的視座から、「自然」のなかに客観的に実在する法則・秩序を認識することを課題とする、いわゆる「科学」が、その時々人間と社会のあり方に密接につながっていることを論究し続けている。なかでも、両者の関係に一つのモデルを提示した『科学と日常性の文脈』(海鳴社、1977年)を参照されたい。

- 22) 前掲論文「自然的生産諸力」、pp. 83-84。

- 23) 同上論文、p. 84。

- 24) マルクスが合目的な労働行為が動物のそれとは本質的に異なる点として、人間は労働を行う前に予め予想される結果を心像に描いていることを指摘していることはあまりにも有名であるが、それは「言葉」「言語」と切っても切り離せない関係にあるということを示している。なお、言語的コミュニケーションの観点から言語をとらえ、それを労働行為との内在的相互関連で論及したものとして、尾関周二『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店、1989年がある。

- 25) すでにこれまでみたように、「関係」「存在」「意味」「認識」「表出」などのタームは、F. ソシュールの言語論を踏まえて独自の人間論にまで高めた丸山圭三郎氏の一連の研究成果を意識して使用してきた。氏の研究成果として、なかでも次のものを参考にした。『ソシュールの思想』、岩波書店、1981年。『ソシュールを読む』、岩波書店、1983年。『文化のフェティシズム』、頸草書房、1984。『記号学批判／＜非在＞の根拠』(竹田青嗣との共著)、作品社、1985年。『フェティシズムと快楽』紀伊国屋書店、1986年。『生命と過剰』河出書房新社、1987年。『文化記号学の可能性』増補完全版、夏目書房、1993年。『記号的世界と物象化学』(廣松 渉との共著) 情況出版、1993年。以下の議論は、これらの成果に負っている。

- 26) しかし、ここで注意を要するのは、「身分け構造」によって分節される世界は、アприオリに存在する客体と

しての「自然」ではなく、あくまでも各々の種が「アルス構造」（人間や動物に内蔵されている識別のための網の目）を通して認識されたゲシュタルト（視点が構成する地と図の関係）であるということである。

- 27) 和辻哲郎『風土—人間学的考察—』ワイド版岩波文庫，1991年，p.10。

(1994年4月12日受理)